

保育者の 性差と幼児



舟木哲朗

(一)

「保母」ということばは、保育者が女性であることを前提としている。幼稚園では、昭和二十四年の「教育職員免許法」によって、「保母」が「教諭」に代わり、同時に、男性が保育者になる道が開かれた。しかし、保育者の場合は今も「保母」であり、男は保育者になれない。

もっとも現在、幼稚園の男性教諭は、いたって少ない。私の知っている人は、東京に一人と京都に一人しかない。このほかに千葉に一人いるが、この人については私は知らない。また、数年前に仙台に一人いたが、この人は一年でやめてしまった。

このような状況であるから、性差の一般論などをここで出すわ

けにはいかない。実は私も、昭和二十九年から三十六年まで七年間、幼稚園教諭の職についていた。そこでここでは、七年間の私の経験を中心とし、それに、東京と京都の友人について感じていることを織りまぜて、標題についての感想をまとめてみることにする。

〈1〉 男は保育者に適さないか

男は保育者に適さないと言いきっている女園長が大阪にいる。かなり有名な人である。ほんとにそうであろうか。数少ない例ではあるが、私は自分が保育者に適さないなど一度も思ったことがない。また、東京の友人も京都の友人も、ともにりっぱな保育者だ。多くの読者の方は、この友人の名前をよくご存じのことと思う。男は保育者に適さないという人は、この事実をどう解釈しているのだろうか。東京・京都の友人や私は例外的な男性だと見られているのだろうか。それとも、私どもも不適當な存在だと見られているのだろうか。私どもは、不適當だとは思わないから長年にわたって保育に従事した。そしてまた、決して私どもは例外的な（男性的でない）男性だとは思っていない。東京の友人も京都の友人も、きわめて男性的な人だ。私は、幼稚園教諭になる前は中学校教諭だったが、中学校では、勇ましい（M要素の強い）存在だった。だから、幼稚園へ転ずる時に、ある女生徒が心配して「先生大丈夫ですか」と言ったものだ。そんな荒々しい性格で幼稚園の先生がつとまりますか、という意味だ。（その女生徒が

今、幼稚園につとめている) ところが、その女生徒の心配が無意味であったことを、だれよりも彼女自身がよく了解している。

男性が保育者に適さないという考えは「迷信」に過ぎないと私は思う。

〈2〉 男の保育者は「もったいない」か

私が幼稚園勤務を決心した時に、ある著名な教育学者が、「君、それはホン気か？」と驚いたものだ。「もったいない」というのである。保育者を女性に限ってきたことの理由に、このようなことは無かつたであろうか。右の学者先生に対しては失礼なことを申し上げるようだけれども、このような考えは、幼児教育を軽視するもはなはだしい。また、女性に対する侮辱でもある。

私はここで、男女の優劣を論じようとは思わない。しかし一般的には女性よりも男性がすぐれているという考え方が支配的であろう。(これも「迷信」だと私は思う) そして、保育などということは女でじゅうぶんだ(男などのすることではない)という考えが一般にあるように思う。

「人格形成期」だとか「教育の基礎時代」だとかいって、幼児教育の重要性ということが口にされ、本にも書かれている。もしこれをほんただと思うのなら、「もったいない」などといって女任せにすることはできないことだと思うがどんなものだろうか。誤解のないようにするためにつけ加えておくが、私は、女性よりも男性がすぐれているなどとは思わない。男女の優劣など、そ

うかんたんに結論づけられるものではない。

〈3〉 男の保育者は不要か

私は、男性と女性のいづれがすぐれているなどということ論ずるつもりはない。ただし、男性的性格と女性的性格についてなら論じてよい。このことについては、個人差もあるし時代によっても違う。また、民族によっても違う。(もともと、民族による違いというのは、素質的なものではなくてその社会の風習からくるものであろうが……)そして、それにもかかわらず、一部の例外を除いては、現在、ある程度の文明をもっている世界各国の民族に共通するところの、男性的性格と女性的性格というものがある。保育者の性差ということ論ずるには、先ずもって、この男性的性格と女性的性格の問題を考えなければならぬ。したがってまた、男性の保育者というからには、それは、男性的性格の保育者でなければ論ずるに足らない。女性的性格で女性そっくりなことをする男性なら、それは身体的な「性」が男だということだけのことだ。そのような存在であるなら、その保育者と幼児との関係は、コフカ(Co-Fac)のいう「地理的環境」に過ぎない。私がここで問題にしようとするのは、「心理的環境」としての男性である。

一般に、父親のいない子どもは、無気力であったり、決断力が足りなかったりすることが多く、中には不良化の道をたどる者も出てくるといわれているが、子どもが好ましい精神発達をとげる

ためには、両親そろっていることが望ましい。これは、男性的性格と女性的性格の両面が必要なることを物語っている。出張の多い私なども、ほんとに自分の子がかわいそうだと思っている。出張すると、子どもは必らず「つまらない」を連発するそう。帰つて来た時は大喜びしてくれるが……。

そしてこのようなことは、幼稚園や保育所における保育の場でも言えることではないだろうか。多くの幼児は、家庭で父親に接する機会が少ない。そのうえに、幼稚園や保育所での保育者が女

(二)

へい 幼児はどう見ているか

男の保育者は幼児に恐れられるのではないかと心配する人がある。女のやさしき、(男女どちらがやさしいかは外見ではなく、幼児に聞いてみないとわからないが)

が必要だという人がある。たしかに、入園当初には、クラスに一人や二人はそんな幼児がいることもある。しかし、大部分の幼児にはそんなことはないし、例外的な一人か二人も、すぐ馴れてくる。かつて私が幼稚園で担任したある幼児が、在園中に神戸へ転居した。それが今、中学生になつてい

だけということになると、女性的性格の影響だけを強く受け、男性的性格の影響を受けることが不当に少なくなる。私どもが子ども、現在の社会はそれを許さない。忙しくなっている。「レジャーブーム」などというのは、例外的な一部の婦人にしかあてはまらないことばだ。

このような意味で、男の保育者は、不要どころではなくて、積極的に必要であることを強調したい。

る。そのおおかあさんから時々手紙がくるが、七年も過ぎ去った幼稚園時代、そして当時の私のことが、しょっちゅう彼の口から出てくるという。また、中学校では、幼稚園の先生が男だったことをジマンにして話すそう。 (もともと神戸の同級生たちは、幼稚園の男の先生ということは信用しないそうだが)

このようなわけで、幼児たちが、男の先生ということで不都合を感じるということはない、全くないと私は思っている。逆に、男の先生ということをつたいへん喜んでいることが多い。他のクラスを担当している女教

師が出張の時に私が代役をつとめて、幼児たちが拍手カッサイして喜んだこともある。幼児たちは、男性の保育者を望んでいる。平素女性的性格の影響を不当に強く受けているので、何か充たされたいものをもっている。それを充たしてやるために、男性的性格が必要なのだろうと思う。そしてそのことが、幼児の好ましい精神発達のために必要だと思う。

ともかく、男性の保育者が幼児たちに歓迎されることは事実である。もちろん私はこのことで女性不要論をとなえるつもりはない。両性の必要を言いたいのである。

② 保護者はどう見ているか

一部の旧式な保護者の中には、男性の保育者を「変則」と見ている者もある。そして、不安に思っている者もある。しかし、

た、ものをよく考える創造的な態度になつた、などの点をあげている。もっとも一部には、女の子がオテンハになつたという批判もあるが……。

大部分の保護者は歓迎している。そして、幼稚園へ行くことを楽しみにしている、態度やことがハキハキしてきた、動作がキ

③ 女性の保育者はどう見ているか

ビキビして活発になつた、自主的になつ

前にあげた大阪の女園長のように、男はダメだときめつける人も一部にはある。し

かし、大部分の人たちは、男性には男性のよき、があり女性には女性のよきがあるとみている。そして、保育者はやはり女性を主とし、少数の男性が参加するのがよいとみている。つまり、保育という仕事はだいた

(三)

以上いろいろ述べてきたが、はじめにも書いたように、これは私の感想に過ぎない。標題のことについての科学的な研究は、おそらく世界中どこにもないであろうし、私自身も研究してみたことがない。そして、保育者を女性とすることは、従来の世界的な傾向であり、アメリカでも、数年前に男性の幼稚園教員が一人誕生して話題になつた程度である。この人は今どうしているか知らないが、この人をよく知っているあるアメリカの教育学者が、来日した機会に私をたずねてくれた。その時の話では、幼児も保護者もともにこの男の先生を歓迎しているし、彼も非常にはりきつてやっているということだつた。

最後に、まとめとして、男の保育者のもつ意味を次の三点にしばつておく。

第一には、すでに述べたように、男性的性格の影響を直接幼児

に与えることによる教育効果の問題である。

第二には、保育者の集団に新風を送り込むことによる間接的な教育効果の問題である。男だけの社会が健全でないことを私は軍隊生活で経験した。女だけの社会もよくないことは病院の看護婦の社会に見られる。男性が保育者の仲間入りをするることによつて、保育者の集団が活気のある健全なものになり、それが間接的に保育効果を高めるだろう。

第三には、保育を近代化するために、傍系の力を利用することである。(失礼な言い方だが)従来の保育は、フレイベルのロマン的な哲学の影響を不当に温存している。これを克服しない限り保育の近代化は望めないと思うが、この役割りを果たすのも、熱意のある男性的性格の男性保育者に期待すべきことだろう。

(島根県教育庁指導主事)